

第1部 地上の星々

コミッサオン・チ・フレンチ「我らが聖なる喜劇」

振付 エリオ・ベジャーニ

踏み出せば、その一歩が事件となり、微笑めば、その一笑みはフラッシュを呼ぶ！特ダネ写真をモノにするためならば、何でもアリだ。しかし気をつけろ。セレブにはガードがしっかり張り付いている。承認の天国と追放の地獄が隣り合うこの舞台では、他人の名声を踏み台にすることさえも認められる一手である。スターダムにのし上がる者と忘れ去られる者とを分かつものは何か？シャッターひとつの瞬間に、上昇も下降も起こり得る。これが、我らが聖なる喜劇。そこでは常にセレブが作り出され、そして破壊されている。

メストリ・サラとポルタ・バンデイラ(第1ペア) シヂクレイ・サントスとグレイス・シンパチーア 「スターダム」

称賛を受ける名声の絶頂。そこではボディーガードなしではいられない。

オープニング・グループ「地上の星々」

世界中の有名人を星として、ハリウッドの例に倣い、サウゲイロ版の「ウォーク・オブ・フェイム」を車いす利用者が表現する。

第1山車「広角レンズ」

このサンバの道に、突如として星々が現れる。有名なものも、無名なものも、一緒に、混ざり合っ

て。日常を離れてまたたき、輝かしい星座を構成する。

DESTAQUE ルイズ・ドゥラン「フォーカス調整」
女性搭乗員「フラッシュ」

第2部 伝説上の名声

第1アーラ「巨星、ツタンカーメン」

ミイラとなつてなお、このファラオは墓から起き上がり、カーニバルに遊ぶ。

第2アーラ「クレオパトラ」

美しくまた虚栄心の強いクレオパトラは、男たちを愛し、魅了し、嫉妬心をかりたて、戦いを起こした。今日であれば、スーパー・モデルとなり、彼女の登場した広告ポスターは永久保存版扱いとなることだろう。

第3アーラ 「いつまでもおそばに」

ファラオの命が輝きを失ったとき、その忠実なるしもべたちも命を捧げた。栄光に従う者たちには、死後に素晴らしい世界が用意されていた。

第4アーラ 「アレキサンダー大王」

世界を征服したアレクサンドロス3世は、今日までその名を残している。自ら指示した伝記には、その業績に加え、あらゆる行動を記録するよう厳命したという。

第5アーラ 「名誉と栄光」

街中の公演や博物館の展示スペースでは、ブロンズ製の胸像や大理石の立像が、時の流れにかき消されなかった人々の記憶を伝えている。

第6アーラ 「名声」

「名声(フェイム)」は神話・伝説よりも「名高い(フェイマスである)」。ゆえに、そう呼ばれる。ギリシャ神話における女神ペーメー(「名声」)の名は人々の声を意味する。速く伝わり、高く揚がるが、そこからの下落は命取りとなる。

DESTAQUI・ヂ・シャオン クリスチアーニ・アウヴェス 「神殿の警護員」

第2山車 「時の痕跡」

ギリシャ神話におけるペーメーは、「人々の声」を意味する寓意的な女神である。ここでは、伝説となった人々を展示する「有名人の殿堂」の上に、巨大なハエがとまっている。

DESTAQUI マウリシオ・ピーナ 「いつまでも」

女性搭乗員 「ハーレム」

男性搭乗員 「ミイラ」

パフォーマンス・グループ 「彫像」

第3部 まやかし

第7アーラ 「人は見かけによらない」

しばしば、我々は第一印象に魅かれ、全面的に安心してしまう。そして、それが偽物だったときに、「輝くもの全て金ならず」などと思出す。

第8アーラ 「ところでピエロとは何者だ？」

控室で、芸人は化粧をほどこし、笑いを浮かべたピエロへと変身する。その顔には、喜びを表す明るい色が塗られながら、隠し切れない悲しい心の影も表現する。

第9アーラ「危険な関係」

恋愛は盲目的な飛行行為であり、その餌食を選ばない。そして後になって結果に直面する。テレビ、電話、ネットの時代ではなおのこと、あふれるメッセージのなかで誰が誰なのかも？

第10アーラ「正直さ」

真実は時に痛い、しかしそれが厳然たる真実というものだ。正直なことは時に残酷でもあるが、最も扱いやすい方法でもある。

メストリ・サラとポルタ・バンデイラ(第2ペア) カルロス・エドゥアルドとルアーナ・ゴメス「禁じられた恋」

魅惑的なダンスの中に、欲望、行先の知れない禁じられた恋、命さえ奪われかねない誘惑が隠されている。

デスタッキ・ヂ・シャオン モニカ・ナシメント「虚栄心」

第11アーラ「偽装・偽造」

偽装・偽造には多くの側面があるが、全て人をだますべく行われている。偽造コインをポケットに入れたときのチャリンという音は本物と同じだろうか？

デスタッキ・ヂ・シャオン エヂクレイア「名声競争の中にいる貴婦人」

第3山車「仮面舞踏会」

仮面は何を隠し、何を光の下にさらすのか？真実を隠す？見せたくないものを見せる？扮装や正体のヒントを示す？カーニバルで用いられる仮面は、重要人物を風刺し、社会規範を捻じ曲げ、カーニバル精神をユーモアで締めくくる。

デスタッキ マリア・エレナ・カダール「機知」

搭乗員「パ・ドウ・ドウ」

第4部 肖像画を発注

第12アーラ「モナリザ」

謎めいた視線と口角の上がり具合が、今日に至るまで、説明できない何かを感じさせる。この世界一有名な微笑みに、我々は捉えられ続けている。

第13アーラ「ルイ14世」

フランス王ルイ14世は限界を超えていた。太陽王、聖なるものの生まれ変わりとして君臨し、肖

像画を描かせることでその名声を永遠のものとした。栄光と威光を後世に伝えるこの手法のはしりと考えられる。

第14アーラ「タルシーラ、食人習慣的表現」

タルシーラは鮮やかな色使いで芳醇な大地を描き、現代のブラジルの肖像画を生み出した。女性ならではの大胆さと時代に先駆けた表現様式を併せ持った画家だった。

ハイーニャ・ダ・バテリア ヴィヴィアーニ・アラウージョ「インスピレーション」

第15アーラ (バテリア)「チェ・ゲバラ」

チェ・ゲバラの肖像は、有名な宗教画や商標にさえ比肩する、世界で最も知られた写真のひとつである。完璧なポップの象徴として、警察からロックまで、そして我らがフリオーザの太鼓の響きにまで採り入れられている。

第16アーラ (パシスタス)「フリーダ・カーロ」

メキシコ人画家フリーダ・カーロの現実には、その色使いを通して世界の心を掴んだ。実生活の不幸を乗り越え、理想と権利のために戦う女性の立場を支持した。

第17アーラ「ファン・ゴッホとひまわり」

ゴッホの人生と作品とは密接に結びついている。天才的革新者、孤立、挫折。これら全てがあつて、感情・感動をキャンバスに再現することにとりつかれた、この芸術家の名声が作られたのだ。

第18アーラ「多面化」

パブロ・ピカソは「芸術とは我々に真実を悟らせようとする嘘である」と語っている。これを反映して虚実を合わせて表現された彼の作品は世界を魅了し、現代美術の洗練性と技巧性の同義としてとらえられている。

DESTAQUE・チ・シャオン フェルナンダ「チ・カヴァウカンチのカーニバル」

第4山車「アトリエ」

王が肖像を描かせたのは、自らの存在を後世まで残そうと望んだからだ。宮廷画家たちは王や女王の顔を永久保存し、肖像画という分野を創始し、王家の血を引く権力者たちの虚栄心を描き出した。キャンバスに描かれた顔によって、対象の個人の権力と虚栄心をも表現することができるのだ。

DESTAQUE ホナウド・バホス「太陽王」

女性搭乗員「器用な手先」

パフォーマンス搭乗員「モデルのポージング」

第5部 フォトショップ

第19アーラ「目には目を」

我々は視覚すなわち目を通して、世界のあらゆるものを認識する。美しいもの、醜いもの、良いもの、悪いもの。

第20アーラ「ハチミツの唇」

口は話の出るところ、唇(ラビオ)があるところ、詐話(ラビア)が出るところである。唇はそれ自体が魅力的で、口づけを誘う。口づけは欲望の扉を開く。

第21アーラ「横顔」

あなたが自信のあるのはどの角度だろうか？ある角度からは幅広に見え、ある角度からは良く見え、ある角度からは歪んで見える。前から、横から、斜めから、カメラは奇跡的な働きをする。

背景(小出車)「脂肪吸引機」

肥満者にとって夢のような機械。この「友」に身をまかせれば、脂肪をことごとく吸い取ってくれて、痩せた体を手に入れることができる。美しい体が得られれば、15分ほどの名声に酔う時間を手に入れようと並ぶ列に加わる鍵を手にしたことになる。

DESTACQUE・チ・シャオン カルリーニョス・コレオーグラフォ「完璧な仕上げ」

第22アーラ「鏡よ鏡、鏡さん」

見栄えが良くないのなら、それは鏡が悪い。見栄えが完璧な時、鏡は最高の仲間だ。鏡は話さない。嘘をつくこともない。しかし、覗き込みたい気持ちに逆らえる人がいるだろうか？

第23アーラ「整形手術」

お望みは、何かを取り除くこと？それとも付け加えること？全面的に作り変えること？少しいじるだけ？ありのままの自分に大満足の人などいるだろうか？

第24アーラ「健全な身体」

健全な身体に健全な精神が宿る、、、と望まれた結果、、、体は、切って、つないで、彫り上げられ、、、今や彫像のようになってしまった。

DESTACQUE・チ・シャオン ヴァレスカ「蜃気楼」

第5山車「フォトショッピング」

写真のうつりをよくすることは、言葉でどうこうすることではない。それは事実だ。それが写真だ！ということで、フォーカスを調整し、ここを消して、あっちを増して、あるものを消して、無いものを作り上げる。この現代の「ショッピング」なら、なんでも買える。素晴らしい見た目までも。

DESTAQUE NEUMARAL・PIRELLA「ナルキツソス」

搭乗員「4つの感覚器官と見映え」

第6部 プレジャー・アイランド

第25アール「アロハ」

ハワイの人々にとって、アロハという言葉は、単なる「こんにちは」「さようなら」「愛」以上の意味をもつ。敢えて説明すれば、生命の力から生じる喜びを共有し、お互いを聖なる力に繋がるようにしようということである。

第26アール「マハロ」

経験すべきなにかを象徴し、かつ、尊敬の意を表す。一般に、感謝の意を表す形で使われている。

第27アール「アカハイ」

優しさをこめた親切さを表す。他の2つの言葉と合わせて、我らが平和で不思議な島へと皆さんを迎えるあいさつとなる。

第28アール（ヴェーリャ・グワルダ）「VIP」

「年長であることは地位だ」という。これに従って、ヴェーリャ・グワルダには相応しい位置を占めてもらう。サウゲイロの名声は、長年にわたってその名を高めてきた人々に負っているのだ。

第29アール「凧」

昔の言葉に「名声を作り、ベッドに横になれ」という。一方、楽しい時の言葉は「さあ、楽しみだけの時間だ」である。

DESTAQUE・Z・SCHAON ミレーナ・ノゲイラ「エキゾチック」

第6山車「プレジャー・アイランド」

夢と空想の島。名声の象徴である鳥が巣をつくる場所。現実をゆうに超え、どのような好みも望みも受けとめる場所。限界は空しかない。

DESTAQUE モニーキ・ラマルキ「愛の技巧」

女性搭乗員「自然」

搭乗員「レジャー」

第7部 サウゲイロの名声、永遠の炎

第30アーラ「デブレー」

1959年、「絵画的および歴史的ブラジル紀行——デブレー」というエンヘッドで、サウゲイロはカーニバルのパレードの美的スタイルに変革をもたらした。

第31アーラ「ズンビー・ドス・パウマーレス」

黒人（逃亡奴隷）の指導者、英雄の物語の採用は、パレードに今までほとんど取り上げられることのなかったテーマをもたらした。ブラジルの黒人の存在感を示すものでありかつ、カーニバルの歴史上重要な分岐点でもある。

第32アーラ「シカ・ダ・シウヴァ」

サウゲイロによって韻文詩・散文詩に歌われた、ミナスジェライス州チアマンチーナ市に暮らした黒人女性奴隷の人生は、サウゲイロの名声を作り上げた多くの至宝的作品のひとつである。

第33アーラ「シコ・ヘイ」

1964年のエンヘッド「シコ・ヘイ」は、カーニバルの歴史的な名作のひとつに数えられる。カーニバルのパレードの構造づくりを大きく変革し、現在まで続く流れを決定づけた。

第34アーラ「エネイダ」

文筆家エネイダ・ヂ・モライスを称えたエンヘッドは、ジョアンジーニョ・トリンタのカルナバレスコとしてのデビュー作として意味をもつ。このエンヘッドの名声は時を越えて鳴り響き、ジョアンの名声については議論の余地もない。

第35アーラ「不朽の存在」

最高のサンバが生みだされるカーザ・ヂ・バンバス（「達人たちの家」）、サウゲイロの作曲部は、スタイル、高貴さ、そして不朽の名作サンバに記されたその名によって、第一位の存在である。

DESTAQUI・ヂ・シャオン クラウヂア・シウヴァ 「フリオーザ（パテリア）のハイニャ」

DESTAQUI・ヂ・シャオン パパウ 「メストリ・ロウロ」

第36アーラ「ハーレクイン的な道化スタイル」

サウゲイロの名声は、構成員ひとりひとりの愛と献身によるものだ。ここでは、我らがバテリアを強化し、無二の存在へと育て上げた、愛しき指揮者、メストリ・ロウロを顕彰する。

デスタッキ・チ・シャオン アドリアーナ・ボンボン「サウゲイロのルーツ」

第7山車「サウゲイロ、私の情熱、私のルーツ」

現在と過去の名声および有名人について語ったうえで、常にアフロ的なテーマで自己規定してきたサウゲイロはあらためて自画像を描き、そして自身もまた有名であることに気づく。サンバの学院、不朽のサンバを生み出し、最高のカルナバレスコたちを生み出したエスコラ、カーニバルの歴史に植えられた巨木、サウゲイロの永遠の未来、成し遂げたことによる名声。

デスタッキ セルジオ・ヒベイロ「豊かな実り」

中央搭乗員「現在と過去」

搭乗員「戦士」